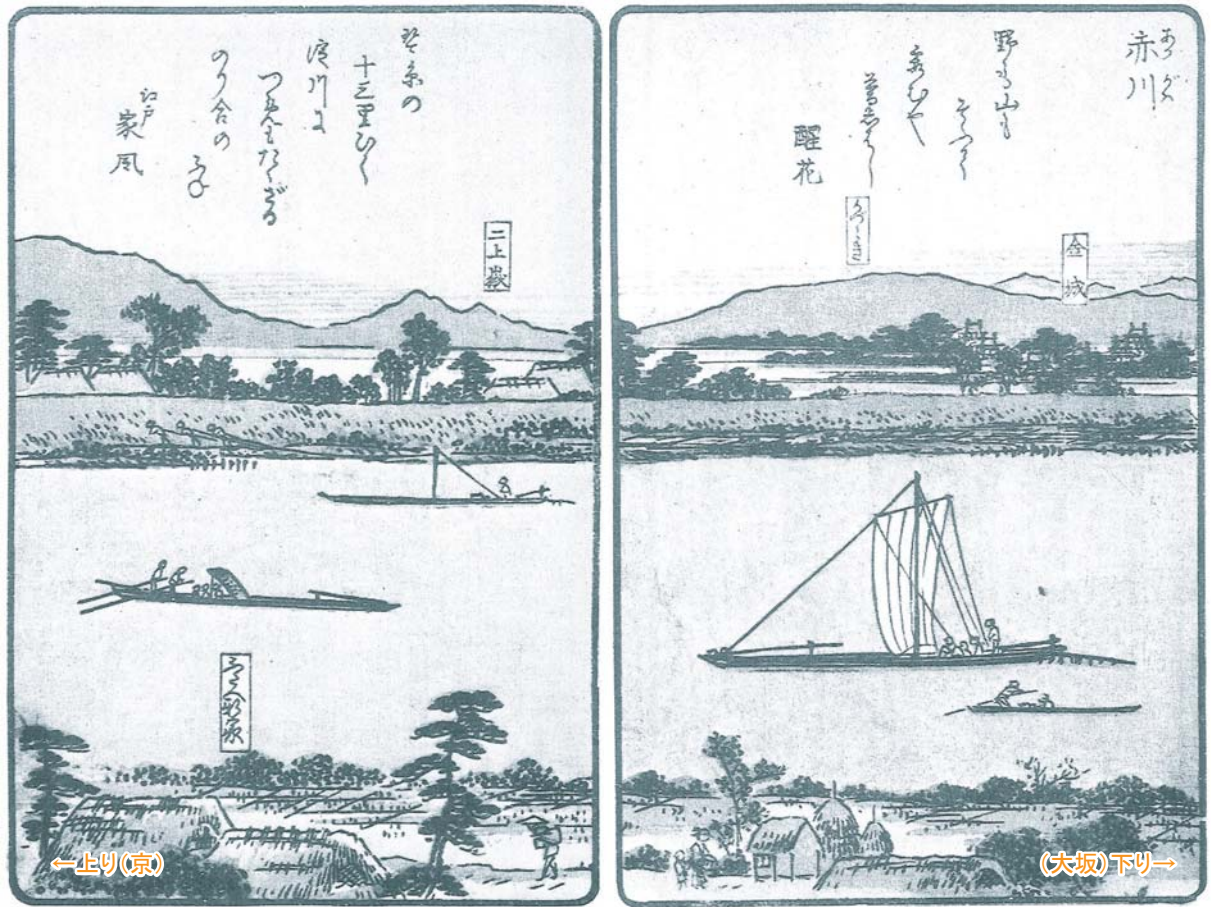


次の赤川の絵図は、東成郡赤川村の対岸の西成郡二重新家(新家村、現在の東淀川区菅原町)付近の内側から描かれた図です。

# 赤川



■ 赤川「淀川両岸一覽」(資料: 淀川河川事務所)

手前には新家村の家や豊里街道(淀川右岸の堤防)を笠をかぶって荷物担いで平田・江口方面に向かっている人が描かれています。

右手前の淀川には小さな下り舟と帆を張った大きめの上り舟があります。

このころの淀川は平田から赤川付近まで丁度西向きに流れていて、平田付近から赤川付近まで流れが緩やかで西風のいい時は、帆を張って川を遡っていたそうです。

《平田には淀川対岸東成郡今市村との間に平太の渡があり中島街道から大坂に向かう重要な渡しとなっていた。そこには淀川上り川舟改の番所[注5](平田の番所)が置かれていたため平田の渡し[注4]とも称された(摂陽群談)上り舟は赤川付近から帆を上げ、平田に大宮があって、その社叢(神社の森)は大宮の杜といわれ淀川を上る船はこの杜を目印に受けて上り、平田辺りで一度帆を降ろし守口浜から帆を逆に揚げて……》

と資料にあります。

平田の番所のその他の役目は淀川の浚渫もあったそうです。大宮の位置は大体判るのですが、番所の場所や大きさや役人の人数などが判りません。

つづいて、淀川の向こう側は赤川村で、左の図の下り舟には船頭二人が棹又は櫓で船を操っています。後方の川岸には上り舟の三人の水夫が帆柱の先端に縄をかけ、船を引っ張り船頭が舵を操っています。

三十石船の乗組員は四人で上り舟の場合は水夫の引っ張り役が三人と操船役1人とわかります。毛馬の引っ張り役の五人の内二人は引っ張り専門の人夫だと毛馬の絵図と比べれば判ります。

向こう側の堤は淀川の堤を利用した古い京街道で、右側の図の右後方に金城(錦城・大坂城)の櫓が描かれています。

現在の赤川の堤防から南を見ると中央区城見のツインビルがみえます。

その少し向こうが大坂城です。但し、このころは天守閣は無く櫓だけです。

左のかつらぎとかかかれています、葛城山なのか葛城地方なのかわかりません。左側の赤川村には四軒の家の屋根が描かれています。

この家の位置は淀川の改修の後、現在、淀川になっています。後方の山は二上嶽(二上山)で後方の山の中に金剛山と書かれていないのが不思議です。

毛馬・赤川の絵図の後方の山や櫓は手前に川筋より大きく描かれています。

江戸時代の後期の絵図ですが、毛馬・赤川を知る貴重な資料です。

毛馬の絵図の中の文章は(第二度目、此所より、上船の水子等上りて、赤川まで甘丁の間引きのぼり、夫より船にのりて、西堤によせ、柴島の三番より上りて、さらし堤を平田の番所の前を通り、江口まで、凡一里余引きて、…)

(訳・・・毛馬より水夫達が川辺に上がり、赤川まで甘丁(約2180m)引き上り、水夫船にのって、対岸の西堤に船を寄せ、柴島の三番より川辺に上がって、さらし堤を平田の番所の前を通り、江口まで、凡一里(約4km)余を引きて…)



■二上山(山並み中央)  
(平成21年11月14日 大阪工大より南方を撮影)



■大阪ビジネスパーク方面  
(平成21年11月14日 大阪工大より南方を撮影)

[注4]

平田(へいだ)の渡しの「平田」は明治時代の淀川改修から昭和45年に豊里大橋が出来るまでの現淀川にあった西成郡豊里村の村営の渡し。のち府営、そののち大正時代の終わりに大阪市営。平太(へいだ)の渡しの「平太」は江戸時代から明治時代の淀川改修まで(旧淀川)の渡船業者の屋号。尚、江戸時代の資料に「平田の渡し」とあるのはまちがいでありません。当時は音(おん)が合えばよかったです。

[注5]

船番所。枚方宿の場合は過書船・伏見船船番所(船の監視、船切手の交付、積荷と船切手の照会、上米の取立てなど)。延宝期(1673~1680年)、大坂の地図の天満橋北詰の船番所の敷地は小学校校地の半分位の広さです。